

幼児詩の問題

多田鐵雄

今度新たに北原白秋氏によつて日本幼児詩集なるものが編まれたが、この幼児詩と云ふのが「二三歳から幼稚園期

までの、即ち文字を綴る前の子供たちが、偶發的に口の言葉で詠つた詩」と云ふ意味であり、この詩集が「數年來全

日本の母人呼びかけて、多くのかゝる幼児詩を募り、その中の傑出したもの約四百篇を選集した」ものであるとす

れば、これは當然私等幼児保育の一端にたづさはる者に取つては一考に價ひするものでなければなるまい。されば私

はこゝで、この本を中心にして幼児詩に就いて考へやうと思ふ。もつとも、こゝに幼児と云ふのは主として幼稚園期

の子供を指すのであるが、その前後一二年のものが含まれても差支へない。即ち兒童の韻律時代から想像時代の初め

頃までを指すものである。

最初に問題となるのは幼児の詩とはどんなものであるかと云ふことである。

幼児の言葉が往々立派な詩であることがある。

牛 (三歳の男子)

はだかの

もうもうがゐるよ。

X

キシヤボツポ (四歳の男子)

X

パウヤト、オヂチャシト

キシヤボツポヘノツテ

オホフナデ、サンドウイツチカツタトキ

セイヤウクワント、デンシンバシラガ

ミエタ。

きしや (五歳の男子)

きしやはえらいな

とうちやんよりえらいや

かあちやんよりすつとえらいよ

もうちろいうみがみえた。

以上は、それに就いて「三歳の男の子が牧場の牛をのぞいて、その母親を顧みた第一の言葉です。これは詩です。

かた言のやうではあるが、この中にどれだけの無邪氣な驚異と愛情と憐愍がありますか。つくづく考へて欲しいと思ひます。あゝ、はだかのもうもう。空は晴れ草は幽かに青み初めても、まだ風は寒かつたでせう。さうしてその田舎の景色もその幼い者には何とも云へず珍らしく感じられたでせう」「まるでアンリー・ルツソオの風景畫でも見るやうではありませんか」「汽車と父母とを比較する突拍子な無邪氣はとても大人の思ひもつかぬ事で、思はず破顔されるではありませんか」と北原氏が評されてゐるやうに或ひは觀察の新鮮、或ひは感受力の鋭敏、或ひは着想の奔

放によつて、實に美事な詩である。

多くの人は直ちにこの事實を以つて——勿論幼児が意識して詩作するのではないことを認めた上ではあるが——幼兒を立派な詩人だとするかも知れない。この編者北原白秋氏にしても、子供研究講座第八卷自六三頂に於ける葛原しげる氏にしても、その本意は元より他に在ることであらうが少なくともそう解釋され易い云ひ方をして居られる。がこの誤解され易い點こそ、究明されてゐねばならぬ事柄であるべきである。

蓋し、大人が單に受動的に、云はば子供の世界の門外漢として、其處に在る詩として、その詩を味ふ限りに於ては勿論幼兒乃至子供を詩人なりとしてゐて、それで結構である。然し乍ら、幼兒の人格から湧き出したものとして、その詩を幼兒自體と結び付けて考へる處の者、云ひ換へればそれが保育者にせよ、藝術教育家にせよ、何等かの點で幼兒と關係し、幼兒に關心を持つ者の立場に在る場合には、特に以上のことが重要なことであるはずである。

幼兒を少しでも知るものには自明のことであるが、幼兒

に取つては周圍の凡ゆるものが珍らしい、又その本體を知りたく願ふ不思議な存在である。何一つとして注意を索かないものはない。このことは自然に所謂詩人の眼を持つこととなる。又幼兒には事實と想像との區別が判然と出来てゐないから、自在な空想、架空の生活を擅まゝにし、現實と非現實の世界を自由に出入、交錯することを恒とする。

このことは幼兒が自然に所謂詩人の心を持つことになる。

最後に、幼兒は言葉の表現法に拘抵しない。「牛が」と云つただけで、自分では「牛が自分に笑ひかけてゐる」ことを表現してゐるつもりでゐるし、又、「牛が啼いてゐる」意味を云つたつもりでもゐる。この意味で幼兒の言葉は含蓄のある言葉である。即ち所謂詩人の口を持つことになるその上に持つて來て幼兒は韻律を殊の外愛してゐるのである。

然し、韻律を例に取つて見てもこの幼兒の韻律は、必ずしも詩の内容と關聯を持つものではない。「子供が早くから韻律愛好の念を示すことは、周知の事實である。未開人が、詩を通しての自己發表の階層に達するに先だつて、言

葉を伴はない、單なる動律によつての自己發表の手段を發見したやうに、子供も、幼い時代に於て、詩を持つに先だつて、既に動律をもつてゐる。この韻律愛好の情念が強いために、子供たちは屢々童謡の内容が殆んど空虚であるにも拘らず、こゝに展開する韻律節奏のためにのみ、これを酷愛する。

向ふの岡に樹が一本、

樹の上に枝一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝。

枝の上に巢が一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝、枝の上の巢。

巢の中に卵が一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝、枝の上に巢、巢の中の卵。云々。

の如きが、子供に愛好せられるのは、全くその節奏の面白さに存する。この點自然民族の大人たちが、自分にも意味の分らぬ詩を好んで歌ふ心理と全く同一である」(松村武雄氏、子供と文學)とあるやうに、偶然かどうかはとも

かく、韻律が幼児の詩の内容に適はしく表はれる場合もある代り、韻律のためのみの内容の無い詩が口に上りもする感覚にしても、觀察にしても、鋭いものがある一方、大人には陳腐なものを、陳腐なまゝに感じ、観てゐる場合もある。着想が奔放自在である一方、荒唐無形でもある。言葉に含蓄がある一方、表現がその内容を示してゐないこともある。要するに幼児の世界が詩の世界であることは事實であつても、それは幼児が詩人、又は詩人の卵であることの意味にはならない、云ひ換へれば、所謂詩人のとは決して詩人のと云ふことではないのである。

幼児の詩作が意識的になされたものでないことを認め、又、「幼児に詩作を強要してはならない」（北原白秋氏）とした上で、なほ幼児は詩人なりとしてならぬ理由は此處に存するのである。

されば鈴木三重吉氏編輯の子供文學雜誌、「赤い鳥」に於けるやうに、同じ子供でも、より大きい學童を中心にしてゐる場合には問題も自ら異なつて來るが、即ちそれが小學一年生であれ、小學六年生であれ、そこには詩作すると

云ふ自覺が在る故に、従つて鑑賞の態度、批評の態度も生じて來る故に、その學童の創作品を取扱ふ場合にも、童心と云ふことを心に置いてさへおけば、それらを小さな、又は發達すべき詩人として、純藝術的な立場から批評しても將又、純藝術教育の立場から指導して行つても、過誤ではないが、このことを幼児詩にまで、移すことは甚だ危険千萬のことである。

幼児詩を観るものは幼児特有の想像力や、韻律愛好性、感受力を知ると共に、常に幼児の誇張、獨斷、無自覺模倣をも恒に考量してゐなくてはならない。その意味で、反面から見れば、幼児詩は幼児の本體を理解把握するための有力な材料としての存在價值を有つものと云へる。事實、例へば、

南風（三歳の女子）

あの南風はこつちへ吹いて來て
赤ちゃんに吹きました。

風、網戸から吹いて來る。

註。夏のあひだ、子供室の前のガラス戸を網戸に入れかへました。もう、あかりのつく頃、由伎子はそこで、赤ちゃん（お人形）を寝かしつけてゐたのです。父より。

この詩に於て、數へ年三歳の子供が南風と云ふ言葉を使つてゐる。三歳の子供に東西南北がわかる筈はない。又、春に吹くのが何風で夏吹くのが何風と云ふ蓋然的な事實をも知るはずがない。この子供は、恐らく、單に唯、風と云ふつもりで南風と云ふ耳で聞いて鶴呑みに覺えてゐた言葉を使つたにすぎない。又、この年齢時代の幼兒は完全な文章を作り得ない。（武政太郎氏、日本の子供、百一頁以下参照）例へば「せんにポツポ見た」と云ふことを、「見たポツポ、先、見た」と云ふ風に表現するのが恒である。従つて、この詩の、「吹いて来て」「吹きました」「吹いて来る」も、この子供がそう云ひたかつたのではなくて、そう云ふ風にしか云へなかつたのだとも考へられる。して見れば、この詩を見て無條件に詩としての美しさを見ることはむしろ過誤にちがいないではないか。むしろ、この詩によつて或ひは、幼兒の言語の發達段階を考へ、或ひは、幼

兒が自由に自己の流儀で委細かまはず南風と云ふ言葉を受け入れ、それをそのまま使馳するその心理を觀察することが大切なことであるとも云へる。

故に「然るに兒童はこの點では生れながらの詩人です。彼等の魂は純真で、怪しい驚異と潑刺とした感動にみちてゐます。そして彼等の發する一言一句は、優れた詩人のそれのやうに、人々を化石の眼から呼び覺す力を持つてゐます」（西條八十氏、兒童文學）とする態度は幼兒詩には直ちに當てはまらないことで、幼兒詩である限りその詩としての價値を置く場合に在つても、その重點を換へねばならぬ。即ち、

面白い晩（六歳の男子）

やあ、母ちゃん……

たいへんなもやだよ、

おうちがぼやつとしてらあ

電氣もぼやけてるよ、

よそのをぢちゃんが

ふわふわしてやつてくらあ、

やあ母ちゃん

おもしろい晩だね。

上例の如きは、もやの風景をキヤツチすることの確實さ

その表現の鮮やかさは三嘆に價するものであるが、常に私達は、幼兒からかゝる藝術的香氣高いものを得ることを喜ぶ前に、

ペリカン (六歳の男子)

日比谷公園の

きれいなお池に

ペリカンと鶴とゐたよ

ペリカンも鶴も

岩の上にゐたよ。

ふんすゐの水が

ペリカンにも鶴にも

かかつてゐたよ。(下略)

の如く、平明に、觀察をそのまま表現し得てゐるものに

幼兒詩として最高標準を置き、又それだけで満足して留まらるべきものと思はれる。

附記

尙、岩波講座教育科學第八冊に於て葛原幽氏が「童話と童謡による兒童觀察」なる題目の下で、童謡のテニヲハによる兒童の智能、性格の觀察を企てて居られることを本稿書上げ後讀んだが、勿論氏自身も云はれてゐる如く、そこでは未だ方法的な解決は與へられてはゐないが、然し、よきヒントを示してゐるものと思ひ、こゝに一言する次第である。

以上